

茂本和宏さんの『いわゆる象は縁側にはいない』（思潮社）から「翼のある生活」全篇。

翼があります

飛べません

肩の付け根が重いです

翼がありません

売ってません

ある日

へなへなと

生えてきたんです

強くない翼です

どうしてなのか

カメラには

写らないから

噂だけが走る翼です

ある日へなへなと

生えてきたから

翼のある生活は

痛いです

買い物したって邪魔だし

階段はいつそうつらいし

それより皆見てくるし

乗り物に乗るとき

翼代をスイカされます
じわつと生活が痛いです

翼があります

飛べません

飛べないけれど

時々部屋で

こっそりと

翼を広げ

浮いてます

こっそりパタパタ

少しだけ

浮いてみる生活です

空を飛ぶ、宙に浮く、という話がでてきたらフロイト先生ならきつとこういうだろう。意識に受け入れられず無意識領域に抑圧され排斥された性的欲動（リビドー）にとらわれている、と。たしかにここには自分ではどうすることもできないが、たしかに自分の欲望である「翼」という衝動が拭いがたくあらわれている。

茂本さんは翼はあるが飛べないといっている。そして、飛べないけれどこっそりと翼を広げてすこしだけ浮いているといっている。「翼」は充たされない自我の欲求であるとともに「飛べない翼」という抑圧でもある。

自分自身が定まらず足元が不安定で、この現実から逃れてみ

たいという気持が昂ぶっているが（フロイト先生なら、性欲が

たかまっている、というだろうが、なにもかも性欲というのはどうだろう）、自分のエネルギーをどこに、どのような形でむければいいのか。いや、そのエネルギーすら自分のものであるのかどうか。だれともしれない他者に欲望された捨てきれない自我であるかもしれない。「少しだけ浮いてみる」という自我との折り合いが痛ましい感じがするが、人はみな、切羽詰まった自我を認識しなくては生きてみることがある。

そんなふうに書かれたものは作者が意識はしていないがつねに意識しつづけているという二律背反的な自我が言語化されたものでしかない。

里中智沙さんの『花を』（ミッドナイトプレス）は日本の古典やグリムなどの童話を題材にとった作品がメインの一冊。里中さんとしてはそちらのほうに力をいれているのだろうが、それらのなかにぼつんと置かれた次の作品に目がとまってしまった。たぶんこの作品は里中さんが意識的に「テーマ」としようとおもって書かれたのではなく、こころのなかのどこかがなにかにつまづいてしまったからできた一篇なのだろう。古典や童話を駆使して呻吟した言葉よりも、そんなところに作者の「素の姿」がひょいとでてくるものだ。その作品「同行者」全篇。

連れ立ってあるく
手をつなぐ

寄り添う
指をからめる
わたしが立ち止まれば
立ち止まる
急げば
小走りについてくる
どこまでも
ついてきてくれる
ひと気のない路地に入って
たむむれにキスをした
ちよつと意地悪して隠れたら
バッグにそつと捉まってる
しだいに
成長する
すらりと背が伸び
肩幅も広く
わたしを寄りかからせてくれる
どんどん遅くなる
もういいのよ と言っても止まらない
どんどん
大きくなる
わたしを抱きすくめる
くわつ、と驚掴みに
腕が 喰い込む
骨まで

苦しい 息ができない 助けて！
誰にも聞こえない

「自我というわたし」が、「他者というわたし」と連れ立って手をつないで歩いている。たわむれにキスをする仲だったが、そのうち「他者というわたし」がしだいに成長して遅くなり、しまいには「自我というわたし」を息ができなくなる状態に追い込んでしまう。ありふれた光景でもある。

「自我というわたし」とは、現に生きているわたしというものを実感しているわたしだが、それが実際に存在しているかどうかは自分にもわからないし、「他者というわたし」とは、なにを求めているかわからないが紛れもない自分、という意味でここでは使っているのだが、そんなふうには、いまある自我と、あり得べき自我の道連れはだれにもあるもので、最初は「自我というわたし」が「他者というわたし」を従えていたのだが、いつからか、どこからか、その立場が逆転するときはいやおうなしにやってくるもので、それが「くわつ、と鷲掴みに腕に喰い込み息もできなくなる」ほどの暴力性をもって「他者というわたし」が前面にでてきて、いままでの「自我というわたし」が背面に押しやられてしまうには、そこには里中さんも予期できなかつた（予期なんかできる人はいないだろうが）決定的ななにごとかがあったわけで、そのことは「自我というわたし」と「他者というわたし」のあいだのできごとで「誰にも聞こえない」できごとである。その暴力的ななにごととはなんであるのか、それはもう読者に手渡されてしまっているのだが、そ

荷をほどこうと

藻掻くほど

疑いは晴れなくて

霧の夜は茫洋と

未知なるものの夢

それだけに

絶っている

出立の小舟はその初からどこへ行くのかわからないのだが、その出立は小舟みずから望んでいる、というのだが、その小舟は「みずみずしさ」とまがしがさと危うさの総重量」のなかを漕ぐことでしか前へ進めなく、つい、その擬態を囿にして自分ほ口を拭っていたくなるのだが、「漕ぐ」という行為はそううまくいくものではなく、「未知なるものの夢」というあるかなきかの快楽を遠くに見据えて、（その幻影に）絶って、「望んだ出立」を終わらせるしかない、という生命の在り方について書かれているのだが、人も人以外もそれとなく、みずからの選択である、というたつたひとつのよりどころを胸に小舟を漕いでいるのだが、それはだれかによって仕組まれたさみしい夢なのかもしれない。そのだれかは、きっと、自分自身でしかない、としかいえないとしても。

この一冊に収められている九〇篇の作品はそういう自我の不安と、それでもなお出立した小舟の行く末を揺動する感情と、その感情を制御する言葉の巧みさがきわだっていた。

最後に置かれた「渴いたものの集合点」全篇。

のせめぎあい「他者としてのわたし」が勝利を収めることで「わたし」は「一歩前へ進んでいくことができる。その寸前のこと」がここには書かれている。

このさき「他者としてのわたし」が「自我としてのわたし」を凌駕したあと、「わたし」はどう変化していくのだろうか、とそのことに興味をもった。

松尾真由美さんの『雫たちのバヴァーヌ』（アジア文化社）は見開きに短い詩一篇と花の写真が対になっている詩集。モノクロの写真が具象でありながら抽象性もかもしだして、官能的ともいえる。なお「バヴァーヌ」とは孔雀という意味をもった十六世紀のヨーロッパでの、ゆっくりと列を作って踊られる組舞、とのこと。この詩集のページを開くごとに一篇の詩と写真が舞踏のように姿をみせる。冒頭におかれた「出立の小舟の危惧」の全篇。

わからない

行方の

小舟

いつも望んで出立する

その葉の襲のさまざま揺れのあたりで

みずみずしさとまがしがさと危うさの総重量

形を変えても変わらずに意外に重たくのしかかる

剥がれた異語の擬態に応じて

とおく

時間は経っていて

いくえもの渴きの表

破船の欠けらのこまやかな部位の冬から

なげく言葉も発せられずに

冷気もなく暖気もなく

鳥のようにふるえていて

ただ一粒の涙

中点で

かすかに

光る

美津島チタルさんの『そば尼僧』（詩遊社）は軽妙な諧謔が特徴の一冊だった。集中から「ろくろ首との遭遇」全篇。

ろくろ首とはこのようなものか

それにしても長い

うねうねとした白い首筋を

ずいぶんとたどっている

倒れた胴体を出発したのが昼どきだったが

全く顔にたどりつけない

身体は山道の入り口

首は獣道に続いていた

暗闇に浮かぶ首

きつとこの先には美しい顔が存在するはずだ

白くてなまめかしい首に強い執着を感じた

私をあざ笑うかのように

首は長く先は

まだまだ見えない

だれもかれも、自分の頭部にいきつくことができない、ということだろう。自分はきつと「白くてなまめかしい」はずだから「きつとこの先には美しい顔」があるはずだと、自己肯定感をもつことで、けっして見ることでできない自分を空想しているのだが、鏡のなかのわたし以外に見えるはずもなく、自己承認も自己肯定もできぬまま、ぼくたちはみずからのろくろ首の頭部を探している。

美津島チタルさんの詩ははじめて読ませていただいたが、こんなふうに通じる効果の特長的な一冊だった。

川柳作家・樋口由紀子さんから『めるくまーる』（ふうらんす堂）をいただいた。「めるくまーる」とは指標とか目印、というような意味。樋口さんにとって句は一種の指標なのだろうか。一頁に一句、あるいは二句と贅沢に造られている一冊。いくつか紹介させていただく。

蓮根によく似たものに近づきたい

薄墨をめざす男がややこしい

夕方は斜めに立つといい気分

困惑を眠らせている金鹽

短いならば短いように舟に積む

はらわたのビー玉行ったり来たりする

夏空は躊躇の意味を教えない

なにごともなかったみたい葱腐る

60と61の違いなど

中途半端な高さを耐える膝頭

なにもない部屋に卵を置いてくる

蓮根は穴だらけである。そんなものに近づきたい、というか、そんなものでありたい、とはだれしもおもうもので、風通しのよい人間でありたいとおもってはいるのだが、泥のなかで育つたものだから、泥に絡まれてにっちもさっちもいかなくなるときがあるし、うまく成長しても、薄墨をめざしたい、などと自分の存在を強烈に印象づけたくはないが、それなりの存在としてだれにも認めさせたいなどと自己主張を繰り返すのだが、なにもかもうまくいかなくて、人生の夕暮れ時になると、からだもこころも斜めにしか立てなくなり、そんな困惑を金だらいのなかにそっとしのばせて、人の一生は終わっていくものかもしれない、などと、樋口さんの句に触発されながら妄想が次から次へとわいてくる一冊だった。